

愉快な朴念仁 第一章 帝国大学修練所

与一君が忽然と姿を消した。いつの間にか寮も引き払って神隠しにあつたように姿を消した。

東京帝国大学では”後年”と呼ぶらしいが、早い話が落第で、帝都にいづらくなつて満州あたりに逃げたのではなからうか？はたまた自殺か？などと憶測が飛び交った。

与一君が所属していた能・狂言倶楽部の仲間たちも与一君失踪の話題が飛び交っていた。能・狂言倶楽部は東京帝国大学に修練所を持つているものの、日本の古典芸能や古武道などを研究する学生の集まる場所なので、その合同修練会にはお茶の水女子大はじめ都内の主だった大学からの学生が集まっていた。

与一君後年の予想は以前からささやかれていた。

皆それぞれの学生達が専門を極める中、やるべきこともやりたいことも見つからずデラシネ(根無し草)の如く無頼を装って怠慢にふけていた与一君に、皆、不安と危機感を持っていた。

会の座長の観世龍太郎は動揺する仲間たちを落ち着かせようと”もしもしかめよ かめさんよ 世界のうちで お前ほど”と、童謡を歌ったが、動揺は収まるどころか”おさるのかごや”赤とんぼ”雨降りお月さん”などの童謡の大合唱になつてしまった。しかしながら、腹の底から地鳴りのような声を出して謡う能の謡(うたい)が身についた人たちなので、およそ童謡と言うより呪いの祝詞をあげているような響きが建物の外まで響いていた。

童謡の大合唱が響く修練所に遅れて入ってきたお能ちゃんは

「え？今日は謡の稽古なの？謡本持つてくるの忘れちゃった。」
と中に入っていくと、一同の声が止んだ。

「ほーっほほほ。これだから庶民の方は嫌ですわ。童謡も知らないなんて情操教育が欠けていらつしゃるのかしら？ほーっほほほ。」

甲高い声できつい言葉を投げつけたのは相当英和女子大の女学生で喜多謡子と言う男爵の御令嬢だった。貴族令嬢であることを鼻にかけるお嬢様で、男子学生たちのマドンナだったお能ちゃんに並々ならぬ敵対心を持っていた。観世君を勝手に婚約者と思ひ込んでいつもまわりついている。

しかしながら、誰が聞いても童謡ではなく呪いの祝詞の大合唱だった。

”東大もつと暮らしいい”の諺があるように、より良い将来を見据えて東京帝国大学の男性をゲットしておこうという下心と野心を持つお嬢様方が寄り付いてくるのも、こうしたインターカレッジ的な倶楽部にはよくあることで、日の本女子大・東京加勢・実戦・極妻など近隣の女学校や遠くは相撲女子大まで将来の出世株を青田刈りに来て対立していた。

「気にしないでくれたまえ、悪気しかない人だ。」

座長の観世龍太郎はお能ちゃんに声をかけた。口は悪いけど根性も悪い喜多謡子お嬢様のごことは誰もが承知の上なので、気にする者はいなかった。

お能ちゃんの背後にいたぼつちやりボツテリした女学生が、上目遣いにか細い声を絞り出した。

「あのう・・・与一様はどうなさつちやっただんでしょう？」

柳沢伯爵令嬢の加奈子様だった。この女学生が来るとさすがの喜多謡子男爵令嬢も威張れなくなる。男爵より伯爵の方が上だからだ。マジンガー Zで言うならば、あしゅら男爵、ビッグマン子爵（ししやくですよ。マン）から続けて読むとえらいことになるから注意しましょう！）、ブロッケン伯爵と階級が上になるのでご記憶の方も多いことでしょう。

柳沢加奈子はお能ちゃんの御学友であつたが、古典芸能ではなく古武道で技を競い合う仲だつた。どちらも幼いころから武道に親しんできたが、剣道、空手、薙刀では身のこなしと動きの速さでお能ちゃんが勝つていたものの、柔術や相撲など組技系の武道では体格の勝る加奈子にかなう相手は都内の女子大にはいなかった。

たまたま武道の帰りに出会つた与一君をお能ちゃんに紹介され、古典芸能のクラブにも顔を出すようになった。

加奈子は与一君失踪の理由に自分とのものであるのではないかと気にかけていた。実はこの時与一君と加奈子はなさぬ仲になつていたのだが、それが与一君の学業不振を招き、後年、失踪。やり逃げであつた。

「そんなことどうでもいいから稽古しよう。人の噂なんて下品じゃないの。」
お能ちゃんは可奈子を促して道場の隅に連れて行つた。

四・五日前に与一君を見かけているお能ちゃんはそのなかに遠くに行つていないことを感じていた。

家庭教師のアルバイトに行つたお能ちゃんは、国電中野駅の駅前で誰かを待つ与一君を見かけていた。「可奈子との逢引きかしら？」と声をかけるのを遠慮したのが悔やまれるが、どうせ落第したことを恥ずかしがつているのであつて、そのうち顔を出さだろうと思つていた。

喜多謡子を中心に噂の井戸端会議が繰り広げられる輪から、一人の学生が抜け出してお能ちゃんたちの元に歩んできた。

「鼓は僕がやりましょう。よかですか？」

安徳教経（あんとくのりつね）と言う法学部の学生。九州のお寺の息子であるが、司法試験も合格してお寺を継ぐ気は毛頭ない。学費生活費の足しに私塾での教師も生業の一つで、お能ちゃんの弟の武尊君を教えたことがある。

「敦盛」は男舞と言つて早いテンポの舞であるが、幼少の頃より母親の趣味に付き合わされてきたお能ちゃんの所作動作は群を抜いていた。

CDもテープレコーダーもなかった時代なので生演奏だったが、こうしてレベルの高い謡は培われていたのだ。

お寺出身の安徳君の鼓は長年慣れ親しんできたお経のリズムで、そのまま「大悲心陀羅尼」を讀経したほうが違和感がない鼓だつた。能管を吹いた加奈子も始めて間もないので、インドの蛇使いのようなメロディーを奏でていた。これで舞える自分はエライ！とお能ちゃんは思った。

一度舞つてみて、安徳君は問題点を指摘した。

「足拍子の音が弱いですねえ。」

と、ドン！と床を踏んで音を出して見せた。

”おめえがいうかよ？”とムカツとしたが、指摘は気になっていたところだった。軽量のお能ちゃんには泣き所だった。

「加奈子ちゃん、試しにやってみんしゃい。」

と、安徳君に言われた重量級の加奈子は立ち上がってズドンと足拍子を踏んで見せた。建物が老朽化しているのもだから床の板が割れてしまい、稽古を中断して大工仕事をする羽目になってしまった。

修練会が終わり、流れ解散のように皆それぞれ修練場を後にした。男爵令嬢喜多謡子たちは人気者の観世龍太郎達にまとわりつくように、掃除もせず御茶ノ水駅方面に歩いて行ったので、お能ちゃんと加奈子は修練場の掃除をしながら出るタイミングを見計らっていた。

「やあ、どうやら終わっちゃったようだね。」

掃除も終わり鍵をかけて出ようとしたところに屋島俊寛がやってきた。

「教授に絞られちゃつてね。：：みんな帰っちゃったのか。安徳君も帰っちゃいましたか？」

と、中を覗き込むと、明かりが落とされた修練所の中から

「戸締りの確認しているところですよ。」

と、安徳君の声がした。

「この様子だとうるさいお嬢様方は観世君にくっついて行っちゃったようだね。」

「与一君がおらんようになって、その話題で稽古どころじゃなかったです。ほんなごっこに行ったか？おかげで掃除は三人でやる羽目になったとです。」

喜多謡子お嬢が来るとお気に入りを引き連れて

「私のおごりでございますわ、甘い物でも食べに行きませんか。」

と、一同引き連れてお茶の水界隈の甘味処にだれ込むのがいつものことだったが、そのタイミングについて行けず毎度取り残されるのが屋島君と安徳君と与一君の三人だった。

「僕は田舎もんじゃけん、話題にもついていけないし、あの押し強さは苦手です。それより、屋島さんは満鉄に就職決まったそうですね。ほんなごっこおめでとうございます。」

「いや、そんな大したもんじゃありません。大好きな鉄道ですからね。それより、卒論で苦労します。卒業できなけりや鉄道乗り放題も夢のまた夢になってしまいます。安徳君は弁護士ですか？判事なんか似合いそうですね。」

「僕は地理測量部(国土地理院)に行こうと思っています。」

「ああ、君は地理マニアでしたね。好きなことに没頭できる。これは恵まれています。有難いことです。」

今で言うところの鉄オタと地図オタの二人なので、男爵令嬢喜多謡子の世俗的な感覚からは遠ざかっていた。そういう意味では与一君も世俗とはかけ離れた感性だったが、その都度目の前に出たことに没頭するたちだったので、〇〇オタと呼ばれる一貫性を持った没頭事項は持つていなかった。要するに、世渡りが下手な二人であった。

「安徳君。帰りに蕎麦でも食べようか？」

と湯島天神の階段を下りながら屋島君が安徳君の方を振り返ると、その間に二つの影がいた。

「天ぶら蕎麦が・・・好き！」
お能ちゃんが色つぼく答えた。

江戸の昔から男女の逢引きと言えば蕎麦屋が既定路線であったが、戦況が日本不利になつてきたこの時世に男女が連れ立って歩くことは世間の目線が厳しい。時世でもあつたので、駅に近づくにつれ四人は少しづつ距離をとり、通りを歩く憲兵の目線を気にしながらなじみの蕎麦屋に入った。

「いらつしゃい！今日は五右衛門頭の書生さんは来ていないのかい？」

五右衛門頭の書生とは与一君のことで、髪の毛が硬いので伸びてくるとX-JAPANのようにムースを用いずとも髪の毛が上に立ち上がってしまうため、石川五右衛門にあやかつて五右衛門頭と呼ばれていた。

「与一君はしばらく来られないですよ。え〜と。僕らは・・・いつものでいい？」
安徳君とお能ちゃんは黙つてうなずいた。これは「天ぶらそばでいいのか？」と言う暗黙の了解であつた。

「加奈子さんは？」

「私もいつもの物でお願いします。」

「それじゃあ、いつもの三つと、いつものを一つお願いします。」

「あいよ！天ぶらそば三つと、天ぶらうどんにかつ井にザル蕎麦ひとつね。ザル蕎麦はいつも出ししましょうか？」

「食後のデザートで。」
と、加奈子は答えた。

与一君と同じ文学部の屋島君は与一君が失踪する前から不穏な動きがあつたことを話した。卒業論文で忙しい時期なのに、突然、与一君はその研究をやめたのだが、それは落とした単位を補修できずに後年を覚悟したからだと思つていて、それにしても失意の逃亡ならなぜ寮まで払つて出て行ったのか？それが疑問だつた。

「彼はその時思いついたことに理屈をつけてのめり込む習性があつたからね。何かよからぬことに興味を持ち始めたんじゃないか？」

「まさか、共産主義ばいようですか？」

「それで官憲に追われて姿を消した？彼の正義感をコミンテルンに逆用されたらあり得ないことではないけど、まさか既に捕まっているのでは？」

「あの風体では疑われてもしかたなかですばい。」

「加奈子さんは与一君と親しかつたようですが、何か心当たりはありますか？」

天ぶらうどんとかつ井を食べ終え、デザートのござるそばに手を付け始めた加奈子の動きが停まつた。

「心当たりは・・・思いつきません。」

あの日、酔つた勢いで与一君を送り襟締めで失神させてことに及んでしまった加奈子は、自分との関係が与一君を苦しめていたのではなからうか？と負い目を持っていたが、そのことは口に出せなかつた。

「皆さんは卒業後どうなさるおつもりで？」

安德君に聞かれて加奈子は口ごもってしまった。

「私たち女性は仕事なんて……学友には在学中に嫁いでしまったかたもいらつしやいますし。」

「菜々緒さまなんてそうじゃない。お金持ちの実業家に見初められてさっさと嫁いでしまつて今ではお子様もいらつしやる。加奈子さんだつていいとこの御令嬢だもの、もうお話がいつぱい舞い込んでゐるんじゃないの？」

お能ちゃんの明るいついに手を振りながら、

「とんでもない！ 私が嫁ぐなんて。それに私は……そんなことよりあんたこそどうなのよ！」

とお能ちゃんに話を振った。

「私は瀬戸内の小島の教師になるの。生まれてこの方ずーっと東京しか知らないから一度外に出てみようと思つてゐるの。」

「良くご両親が納得してくださつたわね。」

「お能さんの所はご家庭がしっかりしているから安心して外に出られるんですよ。」

屋島君の言葉に安德君もうなづいていた。

「確かにそうねえ。気がかりと言えば弟が予科練に志願したがつてゐることなんだけど、与謝野晶子の心境がわかる気もするなあ。」

「ああ弟よ君を泣く 君死にたまふことなかれ ”つてやつか。同じ時代が回つてきてしまつたと言ふことだね。」

「御意。」

屋島君と安德君はいつの間にか注文していた熱燗を盃に次ぎ合つていた。

今のようにワリカンなんて概念がなかった時代、貧乏学生と違つて伯爵令嬢の加奈子は懐が豊かなので、このメンバーの食事の時はいつも加奈子が代金を持つのだが、財布をこつそり
与一君に渡して顔を立てる奥ゆかしさを持っていた。もつとも、半分は大食漢の加奈子が食べたものであったが。

なじみの蕎麦屋なので、おやじさんがデザートにあんみつを持って来てくれた。加奈子にとってはデザートはデザートである。熱燗の二人の分をお能ちゃんと加奈子が分け合つて食べってしまった。

与一君がいないので、加奈子はテーブルの下から屋島君に財布を渡した。

やがて、柳沢伯爵家の自家用車が蕎麦屋の前に横付けされ、運転手の君田が店に入つてきた。

「加奈子様、そろそろお帰りのお時間です。」

加奈子とお能ちゃんは柳沢家のフォードに乗り込み帰路に就いた。アメリカと戦争になりながらも、アメリカのノックダウン生産の車両が溢れている東京だった。

靖国通りを入っていると、柳沢家のフォードを追いかけてくる青年がいた。

「タクシーと間違えてゐるようですね？」

後ろを振り向いて君田が言った。

やがて青年はものすごい勢いで柳沢家のフォードを追い抜いて走り去つた。

皇居勤労奉仕団として秋田からやつてきたネロさんであった。